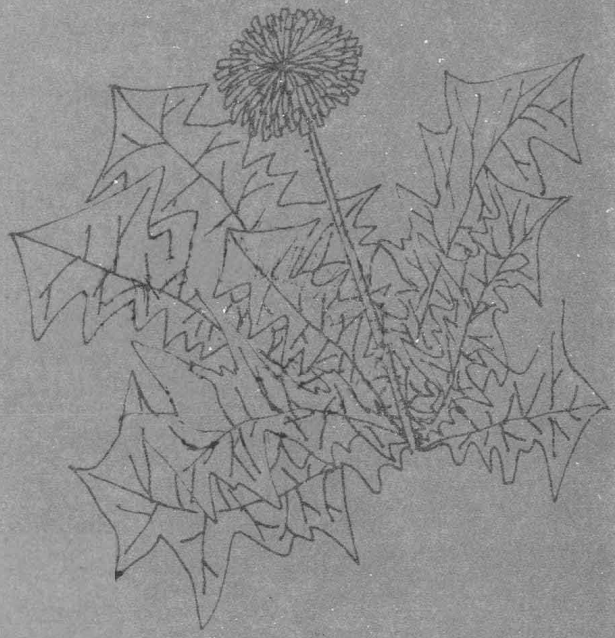
山を走る女

津島佑子

山を走る女

津島佑子

講談社



山を走る女

昭和五十五年十一月十五日　第一刷発行

著　者　津島佑子
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
定　価　一二〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

© Yuko Tsushima 1980, Printed in Japan

0093-168779-2253 (0)　(文1)

目次

真夏 5
森 17
泣き声 53
道 89
冬 130
若葉 184
山 223
顔 264

装幀・朝倉　摂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山を走る女

真夏

眠りのなかで、その痛みは多喜子の名を呼ぶ声のように感じられた。呼ばれている多喜子は、幼ない頃の多喜子だった。でも、やがて、あの声だって消えていく。それだけの思いが、眠っている多喜子の体のなかに、心地良い夢のようにたゆたっていた。

しかし、声は少しずつ多喜子に近づいてきた。下腹が、声に応えて、微かに震えはじめる。眼醒めたくない。眼醒めなくてはならないようなことではない。多喜子は思い、そして眼を開けた。

暗い部屋に、小高多喜子は一人で寝ていた。花模様のカーテンの左の方が路地を照らす水銀燈の光を受けて、ほの白く見えた。まだ、寝ついた時の夜が続いていた。カーテンに隠されている窓は開け放したままだった。が、ほとんど涼しさは感じられない。七月の終わり頃から、夜になっても、日中の暑さが淀み続けるようになっていた。

多喜子は寝返りを打ち、体に暑苦しくまといついているタオル・ケットから逃がれようとした。ふと、下腹がまだ、眠りのなかの声に応え続けているのに気がついた。痛みが、そこから膨

らみだそうとしているようだった。尿意とは違っていた。なんなのだろう。怪訝な思いで、多喜子は自分の腹に手をやった。大きな、重い腹が、他人のもののようにあった。全身が突然、眠気から離れた。

寝床から起き上がり、カーテンを開けて、枕もとに置いてあった腕時計を見つめはじめた。このはっきりしない痛みが、もし本当に陣痛と呼ばれるものならば、一定の間隔を置いて感じられるはずだった。そのように、聞かされていた。産院で言われた予定日を、一週間過ぎていた。

時計の針は四時十分前を差していた。多喜子は横たわりながら、腕時計に見入り続けた。一時間が過ぎた。窓の外が明かるくなりはじめた。痛みは相変わらず、ぼんやりとしたまま、次第に全身に加える重みを増していった。十分程度の間隔があるようだった。

五時半になった時、多喜子はようやく思いを決めて寝床から離れた。手早く着替えを済ませ、押入れから入院のための荷物を出した。父親の眼に触れぬよう隠し続けていた、母親の手も一切借りずに用意した荷物だった。現実に役立つことがあるのかどうか、覚束ない気持で、それでも、おもちゃを買うように楽しみながら買った赤ん坊の身につけるもの一式も、その荷物のなかには入っていた。

隣りの部屋と奥の納戸部屋には、それぞれ両親と高校生の弟がまだ寝入っていた。母親がいつもの朝のようにいちばん早く、六時半に起きるはずだった。多喜子の姿の見えないことに気がつけば、産院に出かけたことをすぐに察してくれることだろう。両親の寝ている部屋に行き、囁き声に近い声で産院に電話を掛けてから、両手に荷物を下げ、外に出た。時計は、六時をまわっていた。

家は曲がりくねった、細い路地に面している。古い木造のアパートが寄り集まった区域で、路

地もあちこちで袋小路になっているため、住人ではない人がそこを通り抜けることはむずかしかった。多喜子の家はアパートではなかったが、多喜子にはアパートの住人の方がうらやましかった。日当たりの悪い一帯ではあっても、二階の窓の多くは、朝から夕方までのいずれかの時間に、日の光を浴びていた。多喜子が会社に勤めだしてから、石油ストーヴや、カラー・テレビを買い替えたり、風呂場にシャワーをつけたりしたが、暗い平屋建ての家に日の光を招き寄せることだけはできなかった。

多喜子は路地をゆっくり歩いた。路地は薄暗かったが、見上げれば、すでに空は華やかな色に輝いていた。寝呆けたような蟬の鳴き声が、すぐ近くの空にぽつんと響いていた。両手の荷物は、歩きはじめると、結構重く、腹の痛みも強まっていて、近所の人たちに見咎められぬよう急ぎたくても、ゆっくりとしか歩けなかった。多喜子は胸を張り、顔を上向けて、道を進んだ。腹が人眼につくほど大きくなってからのこの三ヵ月ほどの間に、多喜子は路地をうつむいて歩いたことはなかった。たとえ、雨で水たまりの多い日でも、うつむかずに歩いた。母親が苦にし、そのことで多喜子を母親自身の涙にしている〝ご近所〟の眼に触れるところでは、決してうつむくまい。その姿勢を守ることで、自分の腹のなかの胎児を直接、支えている心地だった。

しかし、二度と、その多喜子は路地に戻ってこない。今度、路地を歩く時には、その時、生きている赤ん坊を抱いているのかどうかは分からないが、どちらにせよ、今のような重い姿ではなくなっているのにちがいない。そして、もうしばらく経てば、ここから本当に離れて行くのだ。赤ん坊と一緒に。

多喜子はほんのわずかの間、眼をつむり、赤ん坊を軽々と胸もとに抱いて、全速力で走る自分の姿を思い浮かべた。妊娠を母親に知られてからというもの、母親の泣き声や、父親の怒鳴り声

の響きのなかで、思い続けてきた自分の姿だった。実際には、学校の生徒だった頃にも、走るのは少しも好きではなかったのに、多喜子はその自分の姿から眼を離すことができなかった。逃げるのではない。ただ、たくましく、自在なものになりたかった。感情というものを知らないものになりたかった。知らないままでも許されるものになりたかった。

赤ん坊の感触は、多喜子にはまだ想像できないものだった。腹のなかで動くものがあったが、それはいつ消え去ってもおかしくはない、気紛れな、余分なものだった。多喜子の母親の方が赤ん坊をすでに、嘆き続けてきた分だけ、受け入れていた。多喜子は胎児をなんの異常もなく、自然に体外に生まれ出る日まで育て上げることに気持を傾け続けてきた。そして、その願いはどうやらかなえられた。

多喜子は路地から、ガードレールのある一方通行の道に出た。車も人の姿も見られなかった。多喜子は左に曲がった。空の華やかさが増していた。右側の家並の蔭に、けさの太陽があった。朝日が、青ずんで見えるアスファルトの道のところどころを、眩しく横切っていた。タクシーが拾えそうな幹線道路に出るには、まだ右に曲がり、広い坂道を下らなければならなかった。腹が再び、痛みだした。荷物を置き、立ちすくんだまま、腹が自分のものに戻ってくるのを待った。腹の痛みは、深海の圧力を多喜子に感じさせた。深海魚を急速に海面に引き上げると、圧力の変化で魚の体は風船のように膨らみ、破裂してしまう、と聞いたことがあった。自分の腹のなかにあるものは、まるでその深海魚のようだ、と多喜子は思った。圧力をその小さな体に集め、かたくなり、深く深く、どこまでも沈みたがっている。自分の体までがその圧力に吸いこまれぬよう、身動きせずに耐えなければならない。

多喜子は、さすがに、多少の心細さを感じずにいられなかった。出産の場所と決めていた都立

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の産院は、電車では家から一時間近くかかるところにある。タクシーなら、三十分ぐらいですむのだろうか。歩いても行ける個人の病院は費用がかかりすぎ、バスで十五分ほどのところにある同じ都立の総合病院は、二ヵ月前に真先に行ってみたのだが、すでに満員で、出産はさせてもらえないということだった。それから電話帳で調べ、今までに一度も行ったことのない街にある産院に入院を予約することができた。二階建ての古い木造の建物で、裏に、殺風景な公園があった。多喜子の家よりも更にみすぼらしい、大きさだけはかなり大きな、二階建ての長屋にまわりを囲まれていて、その中庭のような公園だった。洗濯ものが広々と干され、ドアの取れた冷蔵庫や、中身のないテレビ、こわれた椅子、新聞紙や雑誌の束など、さまざまなものが賑やかに積んであった。

二ヵ月前に、会社を辞めてから、多喜子は暇つぶしも兼ねて、産院に二週間に一度の割合いで通いはじめた。すでに、夏の暑い日々がはじまっていた。診察を終えても真直ぐに帰る気はせず、産院の近くにある菓子屋でアイス・キャンディーを一本か二本買い、一日中日が射すことのないらしい公園に行き、そこでアイス・キャンディーの冷たさをのんびり楽しんだ。体が不自由な様子の老人が必ず木蔭にボール紙を敷いて、うたた寝をしていた。多喜子に眼を止める人は誰もいなかった。

腹がまた軽くなり、多喜子の体は自由になった。荷物を両手に持ち直し、大股に歩きはじめた。一方通行の道から、広い坂道に出た。右に体を曲げると、その日はじめて、全身に直接、朝の光を浴びた。眩しい光だった。街並が足もとに広がり、朝の空が桃色を帯びて広がっていた。真夏の朝の色だった。

朝日の眩しさに眼を細めながら、多喜子は坂道を下りた。太陽が、体の正面に輝いている。微

笑が浮かんだ。母親も、父親も、誰一人、今、この瞬間の自分の喜びを知らずにいる。これ以上に贅沢なひとときはないような気がした。体に当たる日の光が心地良かった。真夏の暑い一日がはじまろうとしていた。

従いていってあげますよ、ほかのことじゃなし、しょうがないでしょうが、とこのところ、母親は多喜子の顔を見れば、溜息混じりで言い、多喜子はそっぽを向き、答えなかった。言い返す必要は感じなかった。赤ん坊を産む時には、一人で家を出て行くことに決めていたし、場合によって一人で行くことがどうしてもできなければ、母親の手を借りるしかないのだった。今までのように、冗談じゃない、それはどういうことよ、中絶しろ、中絶しろって騒いでいたのはどこの誰よ、とは叫び返すことができなくなっていた。出産の日が近づくにつれ、それだけ多喜子も強い気持のままではいられなくなっていた。万一、母親の手を借りなければならなくなった時に、えらそうなことを言ってたくせに、どうせこうなるんじゃないか、あたしがいなくちゃ、お前なんか、けっきょく、なにもできやしないんだ、と言われるようなことは決してあってはならないことだった。

それでも、やはり、赤ん坊を産む時には一人で出て行きたかった。そう、できますように、となにかに祈るような気持で、毎晩、寝床に就いていた。父親も、母親も知らないうちに出て行きたい。今夜こそと思いながら寝つき、まだだったのかと落胆しながら眠醒めることを、毎朝、繰り返していた。

多喜子の腹のなかのものは、誰の喜びにもならないまま、育ち続けた。多喜子にとって、それが自分の妊娠だった。当然のことと思えた。しかし、それならば誰からも一切、手を差し伸べられたくなかった。

出て行け、とあまり何度も父親が怒鳴りながら殴りかかってくるので、予定を早くして、家を出るつもりになったことがあった。出て行けよ、その方がいいよ、と弟もうんざりした顔で多喜子に勧めた。しかし、母親が声をあげて泣き、多喜子を引き留めた。

〈だめだよ、そんなおなかで、今更、どこに行けるっていうの、もう、充分、恥は掻いたよ、だから、いいんだよ、お父さんの言うことなんか、まともに聞くもんじゃない、ばかだよ、ほんとに、二人とも……〉

坂を下りきったところで、再び、腹がかたく、重くなった。荷物を置き、身を屈めながら、ちょうど信号のところで停車していたタクシーに向かって、右手をあげた。

タクシーは多喜子の前に停まり、ドアを開けた。しかし、多喜子はすぐには体を動かして、タクシーに乗りこむことができなかった。運転手に話しかけようとして、口を開けたが、声も出なかった。仕方なく、できるだけの微笑を運転手に向けた。

――大丈夫ですか。

多喜子の体と、傍に置いてある荷物を見て、事情を察したらしい運転手が、運転席のドアを開け、顔を突きだして聞いた。多喜子は笑いながら、何度も頷いて見せた。腹のなかに働いている強い圧力に負けないよう、注意深く、体を動かしてみた。荷物をひとつ持つことができた。

――気をつけてくださいよ。

気がつくと、背後から、運転手がもうひとつの風呂敷包みを持ち、多喜子の背に手を添えてくれていた。

多喜子はようやくの思いで、タクシーに乗りこむことができた。痛みは、なかなか遠ざかってくれなかった。けれども、とにかくもう自分で体を動かす必要はなくなったのだ。タクシーは産

院に多喜子を運んでくれ、産院は多喜子を決まり通りに扱ってくれる。一人きりの、あの眩しい時間は終わったのだ。過ぎてみれば、呆気ないほどの短かい時間だった。

——ほんとに大丈夫ですか。車を出しますよ。できるだけ、そっと走らせますからね。お客さんも我慢しないで、もし、気分が悪くなったりしたら、すぐに言ってくださいよ。なんか起こってから困るのは、お互いさまなんですからね。

多喜子は相変わらず愛想良く、バック・ミラーに映っている運転手の眼に頷いて見せ、小声で産院の名を告げた。それから眼をつむって、柔かな座席に遠慮なく身を沈めた。少しずつ、腹の重さが本来の重さに戻りはじめているようだった。なにも、もう心配することはない。今のこの自分の安心感を、面倒な客を乗せてしまった、とすっかり緊張しているらしい運転手にも伝えてやりたかった。

——大丈夫ですね。体に響きませんね。

運転手は時々、同じ言葉を繰り返すだけで、ほかにはなにも言わなかった。

——はい、なんともありません。

多喜子はいちいち、元気そうに答えた。

道は空いていた。スピードを出さなくても、タクシーは気持良く、滑らかに走り続け、予想していた時間の半分ほどの時間で、産院に着いた。

——どうも、すみませんでした。ずいぶん、早かったんですね。

料金を渡しながら、多喜子は運転手に声を掛けた。運転手ははじめて笑いながら、答えた。

——あと三十分もすれば、道が混んで、こうは早く走れなかったでしょうね。……荷物、持てますか。

――ええ、大丈夫です。……ほんとに、すみませんでした。

もうすぐ、また、陣痛が戻ってくる頃だった。多喜子は二つの荷物を胸もとに抱えて、車を下りた。自動ドアが閉まる時、運転手の顔をはじめて、はっきりと見届けた。多喜子の父親と同じぐらいの、六十代近くの、眼も鼻も小さな男の顔だった。

タクシーが走り去るのを見送ってから、多喜子は産院の入口に体を向けた。建物のなかに、誰もいないように見えた。玄関のガラス戸を押し開けて、道に出てくる人もいなかったし、玄関脇の受付に、診察券を出すために並んでいる妊婦たちの列もなかった。古い建物は静まりかえっていた。ガラス戸に、明かるい朝の空と向かいの家の影が映っていた。

ガラス戸は鍵が閉まっていないようだが、勝手になかに入ってしまってもかまわないのだろうか。多喜子は心もとない気持になった。タクシーの運転手がまだ、いてくれたら。が、自分が家を出る前に、産院に電話を掛けたことを思い出し、こわごわガラス戸を押し開けた。電話に出た看護婦らしい女の声は、それでしたら、早くいらしてください、玄関は開いていますから、直接、二階の看護婦詰所に来て、名前を言ってください、その時、御自分の靴を持ってくることを忘れないように、とこれだけのことを多喜子に告げていた。

多喜子は見知らぬ人の家に忍びこんでいるような心地で、ひとけのない玄関でサンダルを脱ぎ、スリッパに履き換え、自分のサンダルを風呂敷包みに合わせて右手に持って、玄関から真直ぐに続いている廊下を歩いた。その廊下は、外来の待合室を兼ねていた。診察室が右側に並んでいる。左側は、指導室だった。いつも、妊婦たちと、そのなかの何人かが連れてくる子どもたちとで、廊下は賑わっていた。冷房装置はあるのだが、それだけでは少しも涼しくならず、廊下の途中と突き当たりにあるふたつの非常用のドアを開け放して、風を通した方が、よほど、しのぎ

やすかった。そう感じるのは多喜子だけではなく、始終、ほかの人もそのふたつのドアを開け放しては、看護婦に叱られていた。

静かな、薄暗い廊下を渡って、多喜子は右側にある階段を登りはじめた。多喜子がこの建物のなかで知っているのは、そこまでだった。

階段を登りつめると、静まりかえった一階とは打って変わり、入院患者たちのあわただしい朝の光景が、まず眼に入った。ネグリジェ姿の女が二人、階段の正面にある洗面台で、歯を磨いていた。廊下にある長椅子に坐って、世間話をしながら、煙草を吸っている浴衣の女たちもいた。廊下の真中には、食事を運ぶ大きなステンレス製のワゴンが置いてあり、そこに食べ終えた自分たちの朝食の盆を返している女の姿も見えた。

多喜子は途端に気が楽になるのを覚え、浮き浮きとさえして、看護婦詰所に行き、そこにいた小柄な看護婦に自分の名前を告げた。

――ええと……小高さんね。

看護婦は手もとのカルテで多喜子の名前を確認してから、早口にさまざまなことを多喜子に指示した。そして、忙しそうにその場から離れて行ってしまった。

看護婦になにを言われたのか、よく分からなかったので、多喜子は詰所の前に立って、同じ看護婦が戻ってきてくれるのを待ち続けた。

――なんですか、あなたは。邪魔になるから、そこをどいて。

診察器具を乗せたワゴンを押してきた年配の看護婦が、多喜子の体にぶつかって、苛立たしげに言った。

――すみません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com